



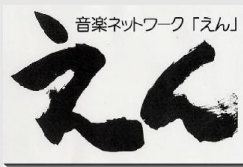
# チューリッヒの秋



～スイスの日本人ピアニスト津田理子の世界～

2006年11月5日(日) 14:00 開場 14:30 開演

大橋サロン



主催：

～ 津田理子 ～

ピアニスト津田理子は、安川加寿子に師事した後、渡欧。ベルギーのブリュッセル音楽院にて名ピアニストのエドワルド・デル・プエイヨに学ぶ。1976年ハエン国際ピアノコンクール優勝、併せてスペイン賞も受賞する。1978年には1978年にはチリ国際ピアノコンクール第2位。1980年、スペインのサンタデール・フェスティヴァルにてスペイン賞を得る。現在、スイスはチューリッヒ在住。チューリッヒ交響楽団の演奏会でソリストとして活躍し、毎年夏にはチューリッヒ・トーンハレで「津田理子ムジーク・トレッフエン」という室内楽とソロのリサイタル・シリーズを開催し、好評を博している。またベルギーのCypes社からヒナステラのピアノ曲全集をはじめショパンのピアノ協奏曲など六枚のCDをリリース。レコード芸術誌などで特薦となるなど、高い評価を受けている。

## 本日のプログラム

このリサイタルは、生誕 250 年を迎えたモーツァルトと、その影響を受けた作曲家たちの作品をテーマでプログラミングされており、天才モーツァルトが書いたロンドイ短調 K.511 から演奏がはじまります。

この曲は、親しかったハッツフェルト伯爵がデュッセルドルフで急死したことを受けて、その一ヶ月後の 1787 年 3 月はじめに書かれました。モーツァルトは病気の父に宛てて「僕同様、彼を知っていたみんなが本当に心から哀れなのです」と手紙に書いており、多くのロンドが持つ快活さとはおよそ異なる、深い憂愁を滲えた作品となっています。

1828 年の秋、シューベルトが亡くなるわずか数週間前に、集中して書かれた三曲のソナタは、そのいずれもが 4 楽章からなる充実した傑作群であります。ベートヴェニアーナと呼ばれるほどベートーヴェンの影響が強い音楽だとも言われますが、このピアノ・ソナタイ長調 D.959 は、シューベルトがベートーヴェン風の動機の自由な発展・展開を自らのものとして、単純極まる主題から実にスケールの大きな世界を描いている傑作であります。第一楽章 **Allegro**、第二楽章 **Andantino**、第三楽章スケルツォ、第四楽章 **Rondo, Allegretto** となっていますが、嬰へ短調で書かれた第二楽章の悲しげなメロディーは、シューベルトならではのものですし、スケルツォの大胆なテーマは、彼がいかに幅広い語法を身につけていたかを示す実例でありましょう。終楽章の人なつっこいロンド・テーマをはじめ魅力一杯の作品です。

ここで休憩をいただきます。

リサイタル後半は、ショパンの名曲「舟歌」ではじまります。ショパンが 1845 年の秋から翌年の夏にかけて書いた作品で、ショパンの作品中最も完成された美しさを持つ傑作とされています。

ヴェネチアの Gondola の船頭が歌う舟歌は 6/8 拍子なのですが、この作品ではそれを 12/8 拍子に変更してフレーズをより長くとって、流麗な音楽に仕上げられています。その優しげな表情とは異なり、二重トリルなど、ピアニストに過酷な技術を要求する難曲中の難曲でもあります。

続いてプーランクの「3つのノヴェレッテ」です。ノヴェレッテはドイツ語で「短編小説」といった意味です。三曲セットで書かれたものではありません。第一番は 1927 年に書かれ、詩的な雰囲気を持つ作品。続く第二番は翌 1928 年に書かれ、茶目っ気たっぷりの小品です。そして時が経ち、1959 年に書かれた第三番は、ファリヤの「恋は魔術師」の中のメロディーに基づいた作品ですが、スペインの雰囲気はほとんど感じられず、どこか晩年の孤独感が曲を貫いているようです。

最後はラヴェルの「高雅で感傷的なワルツ」です。シューベルトによく似たタイトルを持つ作品がありますが、この作品はラヴェルが「シューベルトを手本にして一連の円舞曲を作曲した」と語っていますから、偉大な先輩に対するオマージュとして書かれたと考えるべきでしょう。

1911 年に完成されたこの作品は、八つのワルツが切れ目なしに演奏され、高貴さと感傷との対比が鮮やかな作品です。和音に二度のぶつかりを多用するなど、近代的な和声法がらんだんに使われたこの曲は、ラヴェルの作品の中でも特に平易な語り口と高度な技法がバランスした傑作だと言えます。

(文 / 作曲家 徳備 康純)